新しい時代への準備
―自由な発想と新たな国際感覚を―

第15代会長　五十嵐泰夫

私はふとしたきっかけで日本生物工学会に関わるようになり，また周囲の皆様のご推挙により，副会長，会長への道を歩むようになりました．学会の他の先生方と違って，生物工学会の裏方にあたる役目をほとんど経験していません．申し訳ないと思っています．そのため学会の運営を始めるには若干の苦労がありました．幸い，私の前任の第14代会長の新名先生の学会運営は明解かつ即断即決でしたので，副会長を拝命した2年間は，ほとんど何もしないで，というか当時大学から選ばれた副会長は本当にあまりすることがなかったのですが，新名先生のお仕事をじっくりと観察させていただきました．新名先生の学会運営でもっとも印象的だったのは，ともかく積極的に前進するという基本姿勢でした．

そのような準備の後，神戸で私を会長とする新しい執行部が誕生しました．新執行部が生まれたその日にすべての理事・幹事の先生に神戸市内の小さなホテルにお集まりいただいて，泊まりこみで理事懇談会を開催させていただきました．そこで私は，何々の担当の理事は在任中の2年間にこれをしてくださいと，すべての担当理事の方にお願い（指示）を出しました．今，考えれば無茶なことをしたと思いますし，また理事の皆様には生意気で申し訳ないことをしたと思います．ただ，結果としては理事の先生方の大奮闘のお陰で，最初にあげた目標の大部分は達成されたと考えています．

次に私がしたことは，できる限り早期に全支部を廻るということでした．私は「生物工学会こそが日本を代表するバイオサイエンス・バイオテクノロジーの学会である」をキャッチフレーズにしようと考えていました．そのためには，本部だけでなく，支部活動を活性化し，地域におけるそのアピアランスを高めることが必須であると考えました．かなり無理やり支部大会などに押しかけていきましたが，いずれの場合も温かく受け入れてくださり，心より感謝しております．

生物工学会の運営を開始して直ぐに気がついたことがあります．それはこの学会の規模が比較的小さいということを反映してか，個人の声や活動が学会全体に反映しやすいということでした．大きい船は，舵を切ってもなかなか曲がり始めないということでしょうか．しかしこの学会においては，新名会長のころには，すでに若い人の意見もどんどん取り入れていくという風潮がありました．現在，日本は老齢化社会を迎えています．私たち団塊の世代が年取っていけば，若い人たちの閉塞感はさらに強まるでしょう．私は，学術研究においても，研究者が比較的若い時期に，自らの発想で自らの研究分野を切り開いていくことが重要と考えています．その点で，生物工学会の運営でご一緒した当時の若手の先生方が，今研究面で独創的な仕事で活躍されているのを拝見すると，本当に嬉しくなります．学会運営と直接関係あるかどうかは判りませんが．

そもそも私が生物工学会と最初に出会ったのは大阪大学の生物工学国際交流センター（現）のユネスコ事業で東南アジアに行き始めたことによります．それ以来，センターはもちろん，生物工学会も，そして私自身もアジアと深く関わってきました．「日本の生物工学会からアジアの生物工学会へ」，当然の進路ですが，ひとつ考えなければならないことがあります．それは20年，30年前と今では大きく状況が違うということです．経済的にも学術的にもアジアの国々はここに来て大きな力をつけてきており，昔のように「教えてやる，呼んでやる，来てやる」では，当然済まなくなっています．アジアの関連学会と対等な立場で，しかしその中でいかにリーダーシップをとっていくか，これからの皆さんにとって大きな課題になると信じます．

最後に益々の学会の発展と若い皆さんのご活躍をお祈りいたします．